
檻の中

ライラビニオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

檻の中

【ZPDF】

Z2326D

【作者名】

ライラビーライ

【あらすじ】

檻の中で暮らす彼。天使と悪魔の葛藤がやがて自らを破滅を導く

天使と悪魔

彼は生きている。とりあえずは人と呼ばれる生き物の形をして生きている。

彼はまだ子どもだ。

彼はまだ自分の将来を考えることはない。いや、考えているのかかもしれないが、そこにはおそらく無限に広がる闇しかないだろう。彼は彼のその先を想像することができない。考えが先に及ばない……。彼の思考をどう形容していいのか、適当な言葉が見つからないが、強いて言つならば……彼はその世界に生きているようで、実は同じ空間を共有する違う世界の住人かもしれない。彼は小学生の時にこの檻にやってきた。華奢な身体にあどけない笑顔。人なつっこい性格から、彼は誰にでも好かれる子どもかと思った……。

しかしその考えは以外と早く裏切られた。彼は心の闇に悪魔を飼つていた。

それは些細な子ども同士の喧嘩だった。当初じやれあいだつたはずが、いつの間にか喧嘩に発展した。今思えば彼が喧嘩したのは後にも先にもこれが最初で最後だった。

相手の子どもの手が彼の顔に当たった。殴つたとも、叩いたとも表現できない。端から見たら触れたという言い方が一番正しいかもしない。

突然彼の目の色が変わった。相手の胸ぐらを掴むと顔面を一発殴つた。不意の一撃に相手は後ろに倒れた。興奮した彼は息を荒げ肩で上下に揺らしながら倒れたに対しさらなる攻撃を加えようとした。

しかしそれは未遂に終わる。

通りかかった大人が事態をいち早く察知し彼を後ろから羽交い絞めに、その隙に相手は泣きながら逃げていった。大人は助けを呼び、更に大人が集まり、事態は收拾された。

彼を支配した悪魔は大人相手にも怯むことなく牙を向けた。しかし表情は裏腹に涙目になり、上下していた肩はいつの間にか小刻みに震えていた。悪魔は次第に再び闇へ帰つて行つた。

彼も再び彼を取り戻した。冬もすでに終わりを迎えようとしていた2月の終わりの出来事だった。

出会い

彼がこの檻に入ったのは小学5年の冬だった。

暖冬で比較的過ごしやすく、12月だというのに僕は長袖のTシャツ一枚だった。元々汗かきで暑がりという性分だが、さすがに毎年12月ともなれば上にパークーを羽織つていただろう。しかし初めて会った彼は全く違った。黒いナイロンのジャンパーに下はタートルネックのセーター。ジャンパーの裾から覗くセーターの袖で両手は覆われていた。下は少しオーバーサイズ気味のナイロンのパンツ。足のか細いさをコンプレックスにしているのだろうか。

「こんなにちわ

「ちわ

笑顔とは裏腹の眼帯。彼の記録はこの檻に来る前に田を通した。過剰な父親からの身体的虐待により負った傷だとすぐにわかった。殴られ眼球に傷が入る程の怪我。衣服に隠れているが身体中に打撲と裂傷があるらしい。生々しく綴られた記録は、まるで小説の一節を読んでいるような錯覚さえ起させた。

僕は彼と檻の中を歩いた。一通り各部屋の案内を済ませると、彼が入る部屋へと向かつた。

「ここが今日から君の部屋だよ

「ふーん…」

右手を額の下に配置し、何やら首を傾げ考えるポーズをとる彼。

(なんだ?)

わざとらしきといふか、オーバーといふか…彼のとつた身振りに

思わず吹き出しそうになる。テレビでぶつつのアイドルが見せる
よつなアクションがだぶる。

「どうしたの？」

「いや、なんも」

何もないか。僕は間を空けずに部屋の扉を開ける。幸い定員にまだ満たないこの檻には空き部屋がいくつもある。ここもその一つだ。フローリングの6畳に一段のクローゼット付き。真新しいその部屋はまだ新築の建物特有の香りを放っていた。

部屋に入ると彼は新しい環境に落ち着かなくなる犬のように部屋の隅々を見て回る。ぶつぶつと独り言を言いながら。

「了解」

何に納得したのか、途端に彼は落ち着きまた笑顔を見せた。その後部屋にベッドや衣装ケースを持ち込み引越し始まった。

もともと荷物が少なく、一ちらで用意した家具類以外は学用品と衣類くらいである。家具類を配置したらそれらを所定の場所に片付けるだけなねで引越しは短時間で済んだ。引越しの後、環境の急激な変化への急速の意味で自分は彼を一人にした。ここに入る子どもは何か情緒面の不安定さを抱えていることがある。自分はその経験から彼に一人になつて落ち着く時間が必要だと考えた。一人部屋を出た自分は職員室に向かつた。

他児は学校に行つてゐる為、檻は静寂に包まれていた。

次に彼の部屋に行くのはおそらく夕食前になるだろうか。そう思いながらふと後ろを振り返り、自分が出てきた彼の部屋を見る。今頃は家族のことでも思い出しているだろうか。まだ小学生という人間が家族と離れて生活することに必ずしも不安はあるはず。彼もきっとそうだろう。自分がもしこの立場に置かれたら、すさまじい不安感に襲われるはず。情けないかもしれないが、正直な話だ。ただここにいる子どもは被虐待児たち。そんな感情を持つていない子どもが大半をしめる。彼も例外ではなかつた。

他児が帰園し騒がしくなる。宿題に取り組む子どもや、宿題を終えて園内で遊ぶ子ども、静寂な時の流れが激流に変わる。自分は小學生の宿題を見守りながら、彼のことを考えていた。正しく言えば頭から離れなかつた。直感だが、彼の異質さは今まで出会つた子どもにはないものかもしれない、自分はそう思つていた。はつきりとした確信ではない…何がどう変わつてゐるか明確に示せるわけでもない。直感である。その不確定な彼への欺瞞が確信に変わるために時間はからなかつた。

時間は5時半。自分は彼の部屋でその異質さに遭遇する」といな
る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2326d/>

檻の中

2010年12月30日02時11分発行